2005年2月7日 神戸新聞

「復興」を考え直す

論

関西学院大学教授
宮原　浩二郎

「復興」は響きが良い。中身が何であれ、「復興のため」と言われれば反論しにくい。

しかし、おかしなこともある。よその国を勝手に荒らしておいて、自分好みの体制をでっち上げる作業が「人道復興支援」と呼ばれている。この「人道」は怪しいが、「復興」はもっとうさんくさい。

こんなことを考えていたとき、先日開かれた国連防災世界会議のパブリックフォーラムで、パネリストの発言に意表を突かれた。神戸では「復旧より復興を優先させたのが良くなかった」と言うのだ。どういうことだろうか。

阪神・淡路大震災から十年。都心には新しいビルが林立し、海外からの参加者の多くがその「復興」に目を見張った。

しかし神戸の長田区をはじめとする下町はどうか。人口は戻らず、生業は衰退している。「復興」どころか「復旧」さえできていない。

その一因は、「創造的復興」の掛け声のもと、住民の暮らしや生業よりも、都市の大規模再開発を優先した行政にあった。神戸空港がその象徴。地道な市民生活の「復旧」こそ最優先すべきではなかったか。

「復興より復旧を」と言うのだ。

私自身は「創造的復興」を唱えた行政トップの心意気を否定したくはない。単に旧に復するのではなく、創意ある都市再生を目指したのだ。事実、ポートアイランドから眺める神戸の街は以前に増して美しくなった。

もっと昔の関東大震災後の東京大改造や戦後の復興」という言葉自体に高度成長時代の「開発・発展」志向が刷り込まれていたことであるのは、ただあらためて気付く国土再生のような、飛躍的「復興」は今なお近代日本の「開発・発展」志向がこびりついている。

みやはら・こうじろう　1956年東京都生まれ。東京大卒業後、米・ウィスコンシン大大学院博士課程修了。関西学院大社会学部助教授などを経て95年から教授。2002年に副学長。今年1月、創設された災害復興制度研究所所長。著書に「貴人論」「論力の時代」など。

も政治リーダー層の過剰な責任を呼び込んでしまう。この「復興」にも政治リーダー層の過剰なロマンや関連業界の無

バブル崩壊後の日本は「成熟」社会の入り口に立った。市場は飽和し、経済成長は期待できない。少子高齢化は進む。幕末以来増え続けてきた人口がついに減り始める。「開発・発展」志向の不毛と限界が誰の目にも明らかになってきた。

そこで気になるのは、「成熟」の意味である。「もう若くない」「成長できない」「夢がない」などと後ろ向きの話ばかりが目につく。

私は、「成熟」をもっと前向きにとらえたい。個人がよく熟して本物の大人になるように、社会もよく熟して大人になるべき時代なのだ。

成熟した人間は他者を自然に思いやることができる。べったりした同情や憐憫ではなく、すっきりとした共感と愛情から、途方に暮れている人たち、弱っている人たち、苦しんでいる人たちの背中を静かに押してあげることができる。

社会も同じである。大災害に襲われた後、どれくらい大人の思いやりをすみずみにまで行き届かせることができるかどうか。ここにこそ社会の「成熟」が試されている。

華々しい都市の「開発・発展」ではなく、そこに生きる一人ひとりの生きがいと幸福の再生に向けた熟慮。「復興」のイメージもまた、近代の「発展」志向からポスト近代の「成熟」志向へと転換させていく必要がある。

論